



「学食にデニーズを。」

大学構内は耐震やら改修やら工事続きで、講義期間外はとくにドンドンカンカンやっている。研究室の窓の外を、8階の部屋なのに工事の人達が足場を組んで行き来するので、来客は驚くし、自分も落ち着かない。大学にいるのが好きなのだが思索の時間を確保するのが大変だ。そんなときは附属図書館に行って、その広々とした空間と静かで落ち着いた雰囲気とを味わいながら、書物を広げる。周りを見てもレポート作成の資料収集や資格試験のための勉強に取り組む人達で、大学らしい光景となっている。

学食も、図書館とともに、大学らしい場所である。忙しく立ち働く調理の方、料理の匂い、若い人達の話し声。いつでも栄養豊富な食事が摂れるというのは、なんと有難いことか。中央大学のヒルトップといえば、かつては各種店舗がメニューを競った全国的にも有名な学食のデ

パートであったと思う。若者向けのファッション雑誌にも取り上げられていた。店舗が入れ替わって現在では最盛期の面影は薄れてしまったが、四つの階層全て学食という広々とした床面積は、郊外型ショッピングセンターのそれに匹敵し、大学の目玉となるに相応しいであろう。昔は学食を訪れるために京王電鉄に乗ってくる学外者も多かった。今はどうか。

思うに、いまの中央大学は、来訪者に門戸を開放してホスピタリティをもって迎え入れるという態度に少々乏しいのではないか。たとえばモノレール駅から見えやすい場所に総合案内所を設けてはどうか（在校生の父兄や外国人研究者などの来訪者のために）。また、一号館に各学部事務室の出張所を置いてはどうか（簡易な事務手続であれば遠い校舎まで行かずに済む）。保健センターも総合政策学部棟に移せば、救急車が正門から駐車しやすい。国際交流センターは代わりに2号館に。そして学食にはヒルトップ活性化のためにぜひデニーズを。

広報委員 榎崎みどり（法学部准教授）

編集室

「春の使者」の桜がつぼみをひらき、雪解けで勢いづいたせせらぎが新芽を洗う。冬眠から覚めたように動植物が一齐に活気づき、身体を丸めていた人たちはストレッツチよろしき背筋をグイと伸ばす。

重いコートを手を脱ぎ捨て、上着姿に切り替わる。身軽になった分、自然に身体がウキウキし、心もリフレッシュした気分になる。

春は心躍る季節だ。

春は人が異動し、新たな人を迎える季節でもある。新しい風は停滞していた空気を覚醒させもする。フレッシュな新入生を迎えた大学の「春」は、1年でもっとも活気づき、

華やぐシーズンだろう。

後輩が入り、ちよっぴり大人になった先輩たち。たった1年違いなのに、新入生をみて自分の成長に気づかされる2年生。体験を積んで自信を掴み、胸を張れるようになった3年生。就活で社会に触れ、入学以来ひとまわりも二周りも大きくなった4年生。

成長の度合いはおそらく、出会いの数に比例しているはずだ。「良い」出会いばかりでなく、「悪い」出会いもあるだろうが、それもそれ。何だって「肥やし」になるものだ。

充実した学生生活にするかどうかは、出会いの数で決まる。少なくとも思い出は、その数だけ残るに違いない。

（入学企画課 伊藤博）

学生記者が取材・編集する大学広報誌

Hakumon

Chuo
ちゅうおう

2008

春季号

2008年(平成20年)4月1日発行 No.206

発行 中央大学広報委員会

〒192-0393

東京都八王子市東中野742-1

〈編集担当〉

『Hakumonちゅうおう』編集室

☎042-674-2146

印刷 泰成印刷株式会社

〒130-0026

東京都墨田区両国3-1-12

☎03-3631-8141